

安全の定義と日本のゼロ災信仰

ISOでは安全 (safety) とは「freedom from risk which is not tolerable」と定義されます。「許容できないリスクがない」ことです。許容できるリスク (tolerable risk) とは「現在の社会的価値観の文脈で許容されるレベルのリスク」です。リスクとは「危害の発生確率及びその危害の度合いの組み合わせ」のことです。これは現実に即した非常によくできた定義と思います。ゼロ災 (zero harm) というワードは出てきません。

「許容できるリスク」については例えばR7年の交通事故死者数は2547人でした。これはある意味社会的・相対的に許容された死亡であり（個別のケースで許容できない事故は当然あると思いますが）、この死亡を社会的に絶対許容できないとすると車やバイクを社会からなくしてしまうのが最も根本的かつ効果的です。次点で完全自動運転にしてしまう、歩行者が道路に出ないよう完全セパレートする等の工学的な対策も挙げられます。*対策の体系的な考え方については別記事に譲ります。しかしこれらはトレードオフの関係にあり例えば社会から車やバイクをなくすと交通事故が激減する一方非常に大きな問題が発生します。種々の観点と相対的なバランスから現在社会の車やバイクの運用は「現在の社会的価値観の文脈で許容されるレベルのリスク」と言えます。

安全に携わる方はご存じのことと思いますが「絶対的に安全な状態」などありません。ゼロ災はあってもゼロリスクはあり得ません。何も無い平らな床で人が転倒して骨折することだってあります。ゼロ災が続いていたとしてもそれはたまたま起こってないだけかもしれません。日本の安全活動には「ゼロ災 (ゼロリスク) を目標としてみんなで注意していこう」という文化が根強くあります。理念としては良いですが、実際の安全の定義と異なり実現不可能な目標を追いかけ形骸化しやすいので活動指針にするのは避けるべきとされます。

ゼロ災信仰の問題点は下記に挙げる4つです。①報告抑制 (ゼロ災目標のため軽微な災害や未遂事故が報告されない) ②指標の歪み (災害件数だけ見て現場に存在するリスクを見ない) ③責任追及型 (内在リスクを見ず本人の注意不足のせいに) ④安全の形骸化 (唱和・ポスター・無災害記録更新等) そして裏で許容できないリスクが積み重なり重大な事故に繋がるのです。

化学物質自律的管理に代表されるよう社会的に許容されるリスクレベルは変化して (厳しくなって) いきます。目指すべきは、ゼロ災の看板ではなく、「許容できないリスク」をゼロに近づける管理です。